

# 東洋の星座 南方熊楠のネイチャー論考に見られる星宿の語彙

## The Constellations of the Far East

明治時代、科学雑誌ネイチャー誌に 50 編を超える英文論考を載せたことで知られる南方熊楠（1867-1941）が 26 歳の時に発表したデビュー作は天文学に関するものでした。この論考の中で熊楠は中国古来の星座体系である 28 宿について解説し、さらにインドの星座体系と比較をしています。



Public Domain,  
https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=571837

### ● 南方熊楠とネイチャー誌

東京大学の予備門を中退して世界に飛び出した熊楠は、その後アメリカで 6 年間、イギリスで 8 年間の遊学生活を送ります。イギリスに移った翌年にネイチャー誌に発表したこの論文がきっかけとなって大英博物館の要職者に知遇を得た熊楠は、その後大英博物館に自由に出入りを許されることになり、そこでおびただしい量の図書を筆写することによって独学を続けながら（「ロンドン拔書」と呼ばれています）次々とネイチャー誌に論文を投稿していくことになります。当時のネイチャー誌は、最先端の科学論文を集めた専門誌というよりは、むしろ幅広く知的好奇心の対象となるあらゆる学問分野を対象とした博物学の情報通信誌という性格を有し、読者からの質問に答える形での論考が重要な位置を占めていました。熊楠の論考も、一読者からの質問に答える形で書かれたものです。

※ ネイチャー誌は 1869 年に、ヘリウムの名付け親として有名なイギリスの天文学者ノーマン・ロッキヤー（Norman Lockyer, 1836-1920）によって創刊されました。

### ● 28 宿

熊楠は 28 宿を”With Polaris as the centre, the heavens are radiantly divided into the twenty-eight ‘Inns’ of unequal breadths, each division being denominated after its typical constellation, besides enclosing numerous Seats subordinate to the latter.”（北極星を中心に天球は幅の異なる 28 の「宿」に放射状に分割されており、それぞれの区画は代表的な星座の名を冠しているが、その下におびただしい数の星座を従えている。）と説明しています。



『和漢三才図説』（寺島良安）  
所蔵：国文学研究資料館

少年の頃に熊楠が全 105 巻を筆写したと言われる江戸時代の百科事典『和漢三才図説』は、この論考の主要な参考文献であったと考えられています。その第 1 巻が天部（天文学）から始まり、第 2 巻に 28 宿に関する説明があります。この図にも見られるように、宿の幅は均等ではありませんが、月はおよそ 28 日間の周期で公転しているため、夜空を見ると月が 1 日ごとに星座の間を 1 宿ずつ移動しているように見えます。つまりお月様の宿というわけです。

### ● 星宿に関する語彙

論考中に見られる一般的な星や星座の名称としては、Polaris（北極星）や Ursa Major（おおぐま座）があります。ただ北斗七星を熊楠は the North Ladle（北の柄杓）と表記していますが、より一般的には、the Big/Great Dipper（米）や the Plough（英）を使うようです。特徴的なのは以下のように中国語の英語表記が多いことです。

中国語	英語表記	中国語	英語表記
北斗	Peh-tau	室	Shi
枢 α	Shu α	房	Fang
璇 β	Siuen β	牛	Niu (Taurus)
璣 γ	Ki γ	尾	Wi (the Tail)
權 δ	Kiuen δ	柳	Liu (the Willow)
玉衡 ε	Yuh-han ε	胃	Wei (the Stomach)
開陽 ζ	Kai-yang ζ	觜	Su (the Horn of Scops)
攝光 η	Yau-Kwang η	箕	Ki (the Winnowing fan)
星	Sing	井	Tsing (the Well)
精	Tsing	危	Kwei (the unsettled)
紫微垣	Ché-wi Palace	鬼	Kwei (the Ghost)
太微垣	Tai-wi Palace	畢	Pih (the Handle-net)
天市垣	Celestial Emporium	星	Sing (the Star)
傅說	Fu-yeh	房	Fang (the Screen)
造父	Tsau-fu	女	Nü

この論考の結論部で熊楠は読者 M.A.B.氏からの質問に対する答えとして、中国とは全く別の民族であるインドが非常に似通った星座体系をもっていることから、星座の分類体系の類似性は民族の近親関係を示すとは言えないという意見を述べていますが、この点に関しては論拠が甘いという指摘（松居 in 板倉, 2005）もあります。熊楠が依拠した『西陽雜俎』（A.D.860 頃）の記述は『大集教』に基づくものであり、インドの星宿を語るには別系統の『宿曜経』も参考にすべきであるということが述べられています。

※ 参考文献

『南方熊楠英文論考』（ネイチャー誌編）（飯倉照平監修，集英社，2005）

『南方熊楠全集』第 10 巻（英文論考他）（飯倉照平校訂，平凡社，1973）

『南方熊楠のロンドン：国際学術雑誌と近代科学の進歩』（志村真之，慶応義塾大学出版会，2020）

Chinese names	Remarks	Objects of Indian fancy.
1. Niu (Taurus)	The bull with horns.	The head of a bull.
2. Wi (the Tail)	Curved, with a tip bent, like the wicker (tail) in Chinese astrology, this is the tail of the snake.	The serpent.
3. Wei (the Stomach)	The leg of a vessel for cooking.	Same.
4. Su (the Horn of Scops)		The head of Geer (with antlers).
5. Ki (the Winnowing fan)		The horns of cattle.
6. Tsing (the Well)		A footstep.
7. Kwei (the Unsettled)		The dimple of woman.
8. Kwei (the Ghost)	In character, combined with that for "face," form into for "kneel, bow," and its original hieroglyphic represents "one kneeling"; hence it is probably of astrologic origin.	
9. Kwei (the Ghost)	The coffin (with corpse).	The Saint's Hoast.
10. Pih (the Handle-net)		A hat.
11. Sing (the Star)	The hook.	The river-bank.
12. Fang (the Screen)		Heads of head-deers.



『西陽雜俎』（段成式）  
所蔵：国文学研究資料館

Nature, No. 1249, Vol. 48, Oct.5, 1893